

京都教育大学 FD ニュース

No. 80

2016年12月15日

京都教育大学 FD 委員会

本学におけるFD活動へのご理解とご協力に感謝申し上げます。

今回のFDニュースでは、平成28年度前期の中間アンケート、授業アンケート、および第1回FD研修会について報告いたします。

1. 平成28年度前期中間アンケートの実施結果調査報告

授業中間アンケートでは「授業アンケート」の実施の時期や集計に要する時間などから即時性がなく、授業評価の意味合いが強くなりがちです。そこでこの「中間アンケート」は、授業担当者がリアルタイムで学生の要望を把握するなど、授業改善の一助としていただけるよう実施をお願いしています。アンケートの対象科目は「授業アンケート」と同じ6名以上の受講登録がある全授業です。

平成28年度前期 中間アンケートの実施結果調査

回答期限：7月8日

回答総数 89

問1. 独自作成のものも含め授業中間アンケートを実施した
はい 61 いいえ 28 無回答 0

問2. アンケートを実施しなかった主な理由について（原文からほぼ引用）

【時間不足のため】（8件）

- ・今年度は中間時点で時間をとることができなかった。
- ・指定の期間は授業内容が大変密な為、時間がとれませんでした。
- ・特に前期はクラス分けテストがあったので、授業数が一つ少ないので。
- ・時間の余裕がない。
- ・課題制作中で時間的に難しかった。
- ・授業時間に実習を伴い、時間不足の為。
- ・非常勤であり、授業に余裕がない。実習で多くの学生が抜ける？
- ・大規模授業が多く、合わせて300名以上が受講しており、集計に過重な時間と手間がかかるので実施していません。

【毎回の授業で実施しているため】（6件）

- ・毎回の授業でポートフォリオ形式で（自己評価とあわせて）授業にたいするコメントの記述を課しているため。
- ・毎回の授業後小レポートでの学生の意見を次回以降、授業に反映させている。
- ・毎時間、振りかえりを記入させ、学生の意見・要望その他課題を次の時間に返している。
- ・毎回質問アンケートを実施し、授業に関する意見を聞いているため。
- ・毎日のレポートの終わりに授業の感想（含む要望事項）を書かせている。
- ・授業内容を扱う方が有益である。また、毎回の学生の感想を次回の持参レジュメにのせて、コメントも加えてフィードバックを図っているため。

【忘失、確認不足のため】（5件）

- ・実施時期を知らなかった。実施することを知らなかった。
- ・アンケートをすることを忘れていたので。
- ・忘れていました！
- ・アンケート実施に気付かなかった。
- ・実施の時期を逃したため。

【少人数のため】（5件）

- ・少人数の授業で、平常から学生とのやり取りを行っているため。
- ・受講生数が用件を満たさなかったため。
- ・履修者が少なかったため。
- ・受講人数が少なかったため（前回授業の様子からリアクションをフィードバックしてもらっているため）
- ・受講者数が少なかったため。

【最終アンケートで確認するため】（2件）

- ・期末アンケートで充分。普段の学生からの声も参考にしています。
- ・最終アンケートで評価をしてもらいたいと考えたため。

【その他】（4件）

- ・毎年ほぼ同じ内容で実施しているので、過去の期末アンケートの結果があれば充分であるから。
- ・義務ではないと思ったため。
- ・FD委員会のアンケートに回答させるため。
- ・授業内容を扱う方が有益である。

【理由の記載なし】（1件）

中間アンケートの実施は、授業担当者の必要性で判断していただければと考えております。どのような形でも構いませんので、受講生の声を意識していただくきっかけとなれば幸いです。

問3 使用した様式について（複数回答あり）

FD委員会の様式 52 独自の様式 11

【独自の様式】

- ・毎回実施している。
- ・出席調査カード裏面に質問等を記載する様指導している為。またカード記載事項については翌週回の講義にて口頭で説明、あるいは授業改善を実施している。
- ・中間レポートに感想等を書かせています。
- ・毎回授業についての評価を実施しています。

独自の 방법으로学生の意見を汲み取っているという回答がございました。学生の意見を把握する効果的な方法を教員間で共有できる機会を、FD研修会としてご提供できればと思っております。

問4 中間でのアンケートを実施することについて

意義があった／どちらかという意義があった 55

どちらかという意義がなかった／意義がなかった 5

無回答 31（内アンケート未実施 27）

アンケート等を通して、学生の状況を把握する必要性を感じている方が多くおられるようです。またアンケート未実施にも関わらず、本アンケートの回答に多数のご協力をいただきまして、ありがとうございます。

問5 授業中間アンケートの結果を受けて、授業方法・内容を変えた点があれば具体的にお聞かせください。

【実施・FD委員会様式使用】

- ・より授業の構成をわかりやすいものに変えた。(具体性を増したものにした)
- ・少し理解しやすいように授業のスピードを落とした。
- ・レジュメの記載方法の工夫(フォント、文字サイズ等)、配付ペースの変更。
- ・常に改善していこうという意欲をもらう。
- ・ディスカッション形式を増やしてほしいということで、多くの時間を割くようにした。
- ・授業の方法について「なぜそのような方法、教材を用いるのか」という質問があった。理由を回答した。
- ・特に変更していません。
- ・理系の学生と文系の学生で、授業の難易度認識にかなりのひらきがあったので、動機づけを毎回行うようにした(理系学生のために)。
- ・講義とグループワークの時間配分。
- ・なるべくP. Pのスライド枚数を減らす努力をしている(多すぎるという指摘があったため)。
- ・配付プリントの作成法を反映した。
- ・討論形式の授業における進行方法を学生の意見をふまえて変更した。
- ・進行スピードの調整。
- ・時間配分に注意を傾けるようになった。
- ・講義と実技の時間配分の微調整。
- ・特になし。肯定的な意見しか出てこなかったため。
- ・発音、リスニングの時間を増やした。
- ・ビデオ視聴中にかぶせて話をしないで欲しいという指摘があったので気をつけた。
- ・スライドの送りの時間を少しゆっくりするようにした。
- ・プレゼンシートを印刷して配布していたが文書形式に変更してみた。が、学生の反応はプレゼンシートの方が良いとの意見が多かった。
- ・おおむね改善的の指摘がなかったため、特に変更はしなかった。
- ・評価方法を一部見直した。課題を一部変更した。
- ・Students seem to be happy with methodology -) (I) will Continue to work with Them closely.

【実施・独自の様式使用】

- ・学生が今現在悩みを抱えている内容に合わせてシラバスの変更を行った。
- ・取り扱う内容を学生の要望に合わせて追加した。受講生数が少なく時には欠席(実習により)もあったので、FD委員会様式でなく内容についてふりかえり、より深めたい内容について問うものにした。
- ・実習の時間の十分な確保を以後の授業で改善していく。

【実施・いずれの様式も使用】

- ・説明をていねいにするよう試みた。

【未実施】

- ・小テストの結果により家庭学習の時間が増えるように課題を検討した。

FD活動は特別なものではなく、授業をよりよくしていこうという皆様の姿勢そのものがFDといえます。「学び続ける教員」の姿としても、受講生の心に残ることを願っております。

問6 学生へのフィードバックの方法について

【フィードバックしている】 79%

【特別なフィードバックはしていない】 17%

- ・要望がなかったため。

【その他】 4%

- ・Power Point でグラフや自由記述の内容を示しながら。
- ・授業内容の見直しや、授業中での問いかけ等

FD委員会では適宜フィードバックをお願いしております。今後のアンケート実施への理解を得るためにも、結果を学生に伝えていただければありがたく存じます。

問7 FD委員会様式の「中間アンケート」の設問について

【改善の余地あり】 18%

【現状のままでよい】 82%

【改善の余地あり】

- ・質問項目で、回答の基準を考えさせられるものがある。
- ・FD委員会でアンケートを用意していただければ実施は可能？すみません、よくわかっていません。
- ・中間アンケートを実施することによる効果をどう測る、評価するのか。
- ・全ての項目を必ず記入する（無回答／“特になし”の回答を防ぐ）ようにしてはどうか。改善すべき点をあげる学生が少ないことがある。
- ・学生自身のコメントとして『どうしていつも「ちょうどよい」の項目がないのか不思議に思っている』とあり、なるほどと思う。
- ・アンケートで否定的な意見が出て、学問上教えなければならないものは避けることはできない。学生の意見を入れていくと安易な方向に向かってしまう。
- ・学生に授業に取り組む自身の姿勢についても評価させればと思います。
- ・記名式にした方がよい。無責任な記述を排除するため。
- ・まじめに出席して（聞いて）いない学生には意味がないので、授業に積極的に参加しているか聞くほうがよい。
- ・Q1～5を委員会の方で集計してほしい。
- ・4点式か5点式で統一し、最小数を最高点にするのか最大数を最高点とするのかも統一しないと、データ化に極めて不便です。

「中間アンケート」は、かなり定着してきたと感じられます。FD委員会で作成している様式は、期末に行われる授業アンケートからの抜粋ですが、具体的に記述してもらった部分が役に立っているようです。一方、完全に画一的なものよりも、授業ごとに柔軟に対応できる形式にするべきだというご意見もいただきました。なお、期末のアンケートのQ18・19は科目ごとで自由に設問可能で、集計も行われます。是非ご活用ください。

皆さまから頂戴したご意見をもとに、中間アンケートや研修会等のFD活動をより一層意義あるものにしたと思います。ご提案もお待ちしております。

2. 平成 28 年度前期授業アンケート

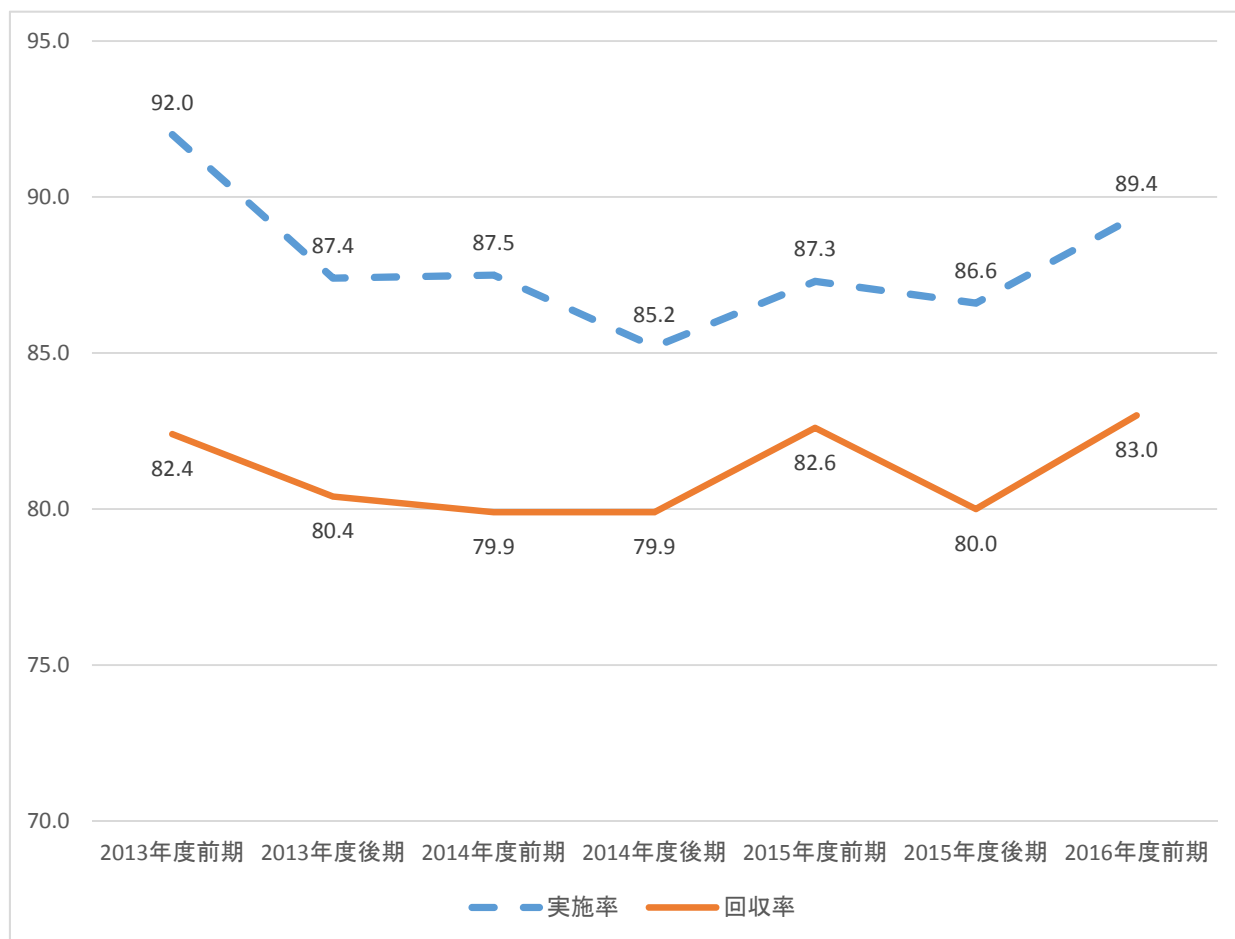
1. 調査の概要

実施期間：2016 年 7 月 20 日（水）～8 月 2 日（火）

対象科目：受講登録者 6 名以上の全授業科目

対象科目数：387，実施科目数：346（実施率 89.4%）（未回収 37 全白紙 4）

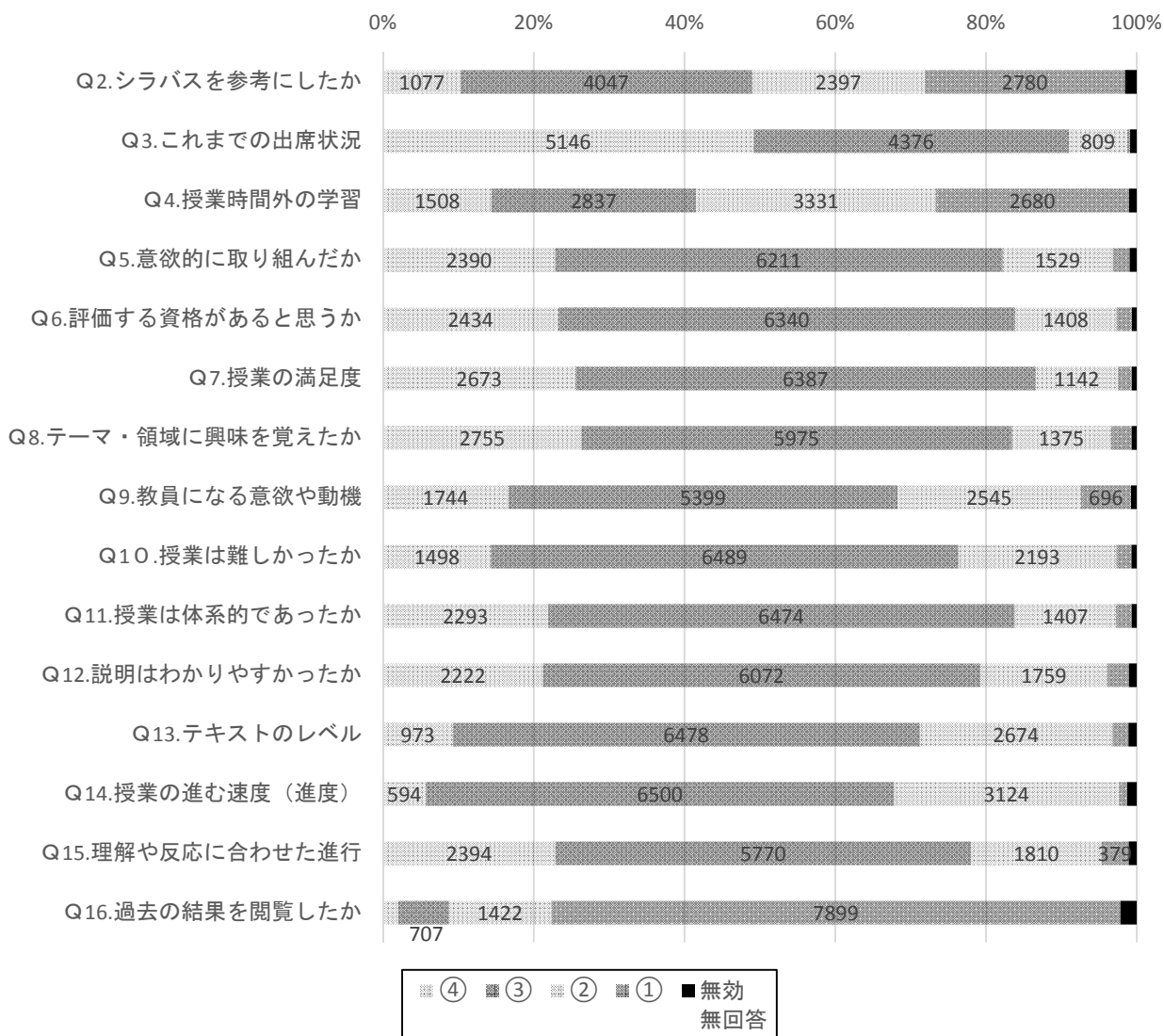
実施科目の履修者数：12,605 名，回答者数：10,463 名（回収率 83.0%）



調査実施率と回収率の変遷（2013 年前期から 2016 年前期）

結果の概要

Q. 02～Q. 16 全体回答の帯グラフ (基本的な母数=10463 一部複数回答)



Q2. 5. 6. 8. 9. 11. 15. ④とても ③やや ②あまり ①ほとんどなし

Q. 3 ④全出席 ③1～2回欠席 ②3～4回欠席 ①5回以上

Q. 4 ④2時間以上 ③1～2時間 ②1時間未満 ①ほとんどなし

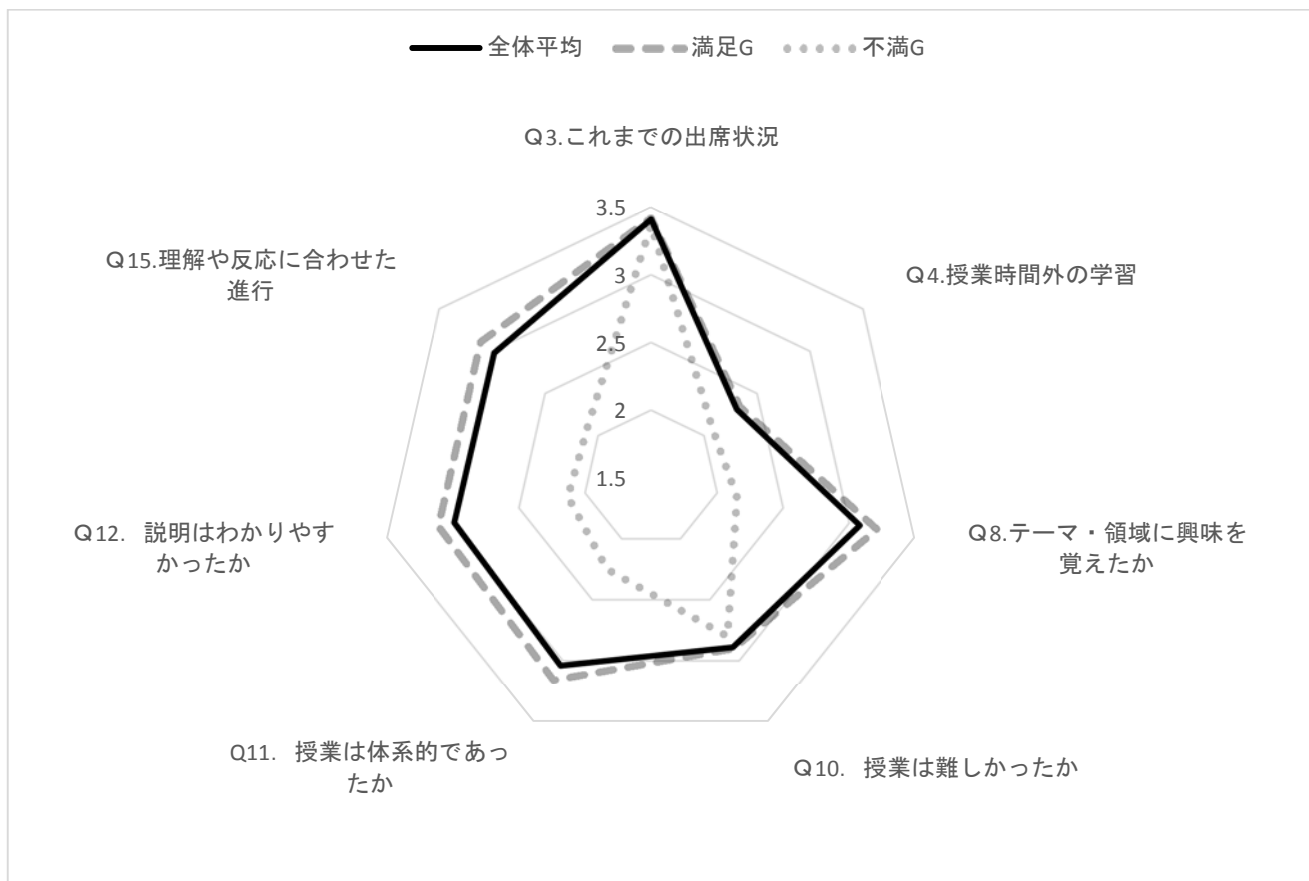
Q. 7 ④満足 ③やや満足 ②やや不満 ①不満

Q. 10. 13 ④難しい ③やや難しい ②やや易しい ①易しい

Q. 12 ④分かりやすい ③やや分かりやすい ②やや分かりにくい ①分かりにくい

Q. 14 ④速い ③やや速い ②やや遅い ①遅い Q. 16 ④ほぼ全て ③閲覧している ②あまり ①全く

全体平均のグラフです。各項目の数値にはほとんど変動がみられませんでした。Q. 16 過去の結果を参考にした学生が微増したような気がします……



授業に満足した群と満足しなかった群の違い

2016年度前期 Q7 授業の満足度についての全体と満足、不満各グループの平値です。回答の86.6%が満足グループのため、全体平均と満足Gが近似値となっています。こちらも毎回同じような傾向が見られます。

FD委員会には、今回取り上げた以外にもアンケートに関する詳細なデータがございますが、それを活かす方法を現在模索中です。「このようなデータを知りたい」というご要望がございましたら、FD委員会にお問い合わせください。可能な範囲でお応えいたします。

3. 第1回FD研修会「アクティブ・ラーニングとは何か」

理学科 谷口慶祐

1. アクティブ・ラーニングとは何か

新学習指導要領で強調されている「思考力・判断力・表現力等」の能力（コンピテンシー）を育むことを実現するため、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習方法である課題探求型学習、いわゆるアクティブ・ラーニングが推奨されています。

このタイプの授業では、一方的に教師・教員等の話を聞いて理解するというのではなく、生徒による議論や教え合い、発表などが含まれています。教員養成系大学では、学部学生・大学院生・現職教員が、課題探求型教育に必要な実践的指導力を身につけるための教育内容・方法を、大学の授業で実践することが求められます。

2. なぜ必要なのか

私なりに考えてみますと、1980年代後半に顕著になる日本企業に対する特許に関する訴訟によって、これまで使用が可能と考えていた各種の技術に対して特許が主張され、使用が難しくなってきました。勤勉な日本人が大量生産した工業製品は品質が良く、壊れにくく、安価ですが、このことが他の先進国のシェアを奪う結果となったため、知的財産権で攻勢をかけてきたものと考えられます。また発展途上国とされてきた国々が発展し、日本が持つ良質な製品を大量生産するという長所に徐々に陰りが見え始めました。これらのことから、これからの日本の生きる道は、開発に重点を置き製品に高付加価値を与えるとともに、生活様式を一変するような革新的な発想・工場製品、例えばスマートフォンや電気自動車、航空産業、宇宙産業、クリーンエネルギー分野などで、自ら開拓し主要な貢献をすることだと思われまます。そのためには、各個人が複雑な状況に対応でき、単に命令をこなすのではなく自ら考え行動できる、いろいろな分野の指導者となるような社会風土を築きことが求められているのではないかと思います。このことは他の様々な分野においても同様に成り立っていると思います。

3. 実践例

1) 正午に太陽が南中しない原因を考えるという小学校教科内容論の授業においては、受講生には最初は何もヒントを与えず、各自の情報端末で自由に調べ、それについて班で議論し、必要な場合は教員（私）に質問するという形式で授業を進め、発言させレポートにまとめさせています。また最後にはほぼ答えとなるようなヒントを与えることによって、知識の定着を図っています。この現象を考える上で重要となる要素は、正午の意味、時差、北極と北磁極の違い、均時差の原因となる地球の公転軌道（楕円）、自転軸の傾きなど、多岐に渡っています。

2) 今年度前期に地学特論Ⅱ（大学院）で4月に発生した熊本地震の解析を行いました。このテーマに関しては、発生して間もないこともあり専門機関での解析もあまり進んでいない時期でしたので、一緒に考えながら進めることとなりましたが、できるだけ自主的な取り組みを尊重しながら、適切な時期に最小限のアドバイスをしよう心掛けました。その結果、横ずれタイプの発震機構であることを確認し、断層が2つに分かれていることが推定できました。

4. 問題点・その他

このタイプの授業の問題点は、通常よりも時間がかかることですが、評価方法においても積極的に発表に取り組む学生はいいのですが、解析に地道に取り組む学生に対する評価が見落とされがちであるということだと感じました。また授業を実施する際には、多くの場合情報端末による情報検索が必要なのですが、そのためには通常の授業での情報機器の使用が必要です。

全体として重要と感じたことは、授業者はテーマに関連した正しい知識・学力を持つことが必要であることに加えて、たとえ未知の分野であったとしても好奇心を持ってサポートできる敏感な感受性と広い教養が必要ではないかと感じました。

問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD委員会委員：太田（委員長）、谷口（慶）（副委員長）、安江、山口、藪根
（事務担当：富家、山本）